

三重大学高等教育デザイン・推進機構の各種成果、取組をお伝えします。

目次

○全学共通教育センター

今年度の英語特別プログラムの実施状況について……………1

PBL「現代生物学の話題」の授業の紹介と発表会の報告……………2

○全学資格プログラムセンター

全学資格プログラムセンター取り組み紹介……………4

○高等教育開発デザイン・IRセンター

三重大学における持続可能な教育・学習の実践：令和3年度卒業生アンケートの結果に基づいて……………5

令和4年度全国大学教育研究センター等協議会 参加報告……………6

令和3年度全学FD・SD「教育の質保証の課題と最新動向 ～教学マネジメントの視点～」の開催報告……………6

○アドミッションセンター

令和4年(2022年)度前期 オンラインTA研修報告……………7

2022年度オープンキャンパス&サマ―セミナー報告……………8

○全国会議等参加状況……………9

発行日

2022年10月13日

編集担当

鄭 漢模

(高等教育デザイン・推進機構 講師)



英語特別プログラム第2回オリエンテーションの様子(7月13日)

今年度の英語特別プログラムの実施状況について

全学共通教育センターでは、これまで教養教育院で設置・運営されてきた英語特別プログラムを引き継ぎ、今年度も実施しています。2015年に設置された英語特別プログラムでは、入学時にTOEIC IPテストで600点以上を取得した1年生を対象に、英語の4技能を養成する科目、アクティブ・ラーニング科目、文系及び理系分野の教養教育講義科目を外国人教員による指導のもと英語のみで履修することにより、実践的な英語力を養成することを目指しています。必要単位を修得し、2年次4月のTOEIC IPテストを受験した学生は、「英語特別プログラム単位修得」として成績証明書に記載されます。

本年度のプログラムの実施にあたっては、まず、4月13日(水)・14日(木)にプログラムの目的と内容、履修方法などについてオンラインで説明会を開催しました。これらの説明会には、81名が参加しました(それぞれ35名と46名)。また、4月15日(金)には、英語特別プログラムの修了生を迎え、新入生と上級生の交流・相談会(オンライン)を開催

したところ、27名(1年生21名、修了生6名)が参加しました。これらの説明会を経て、今年度の英語特別プログラムでは、59名の学生(人文学部7名、教育学部3名、医学部34名、工学部7名、生物資源学部8名)が履修しています。

本年度は、年4回のオリエンテーションを実施する計画としており、これまで4月24日に1回目、7月13日に2回目のオリエンテーションを開催してきました。第1回オリエンテーションはオンラインで開催しましたが、第2回オリエンテーションは、コロナ禍以降、初めて対面で開催しました。毎回、グループに分かれて意見交換をする機会を設けていますが、第2回オリエンテーションでは、身振り手振りも加えながら、英語での会話に意欲的に取り組む学生の姿が多く見られました。今回のオリエンテーションは、9月28日に対面での実施を予定しており、学生が夏休みをどのように過ごしたのか、また、第2回オリエンテーションで立てた目標に対してどのように取り組んだのかなどを報告し合う予定です。

これらのオリエンテーションの機会だけでなく、定期的に履修生が集まり会話をする機会を設けるべく、授業期間中の隔週水曜日のお昼休みの時間帯には、教養教育校舎2号館1階にあるPBLラウンジにおいてEnglish Loungeを開催しています。English Loungeでは、英語のみで会話したり活動に取り組むことにより、英語でのコミュニケーションの機会を設けると共に、履修生間の交流を深めることを目的としています。自由参加であるため、毎回の参加者は僅かではありますが、英語でのゲーム等を通して語彙力や表現力を向上させる機会となっています。後期からは、学生が自主的に計画・運営する機会も設けたいと考えています。

コロナ禍以前までは、このプログラムの締めくくりとして英国シェフィールド大学における2週間の語学研修を実施してきましたが、新型コロナウイルス感染症感染拡大に伴い、2020年度より、中止せざるを得ない状況が続いています。しかしその代替として、シェフィールド大学の協力のもと、オンラインでの

語学研修プログラムを2月に実施しています。オンラインでの研修ではありますが、様々な国の学生と交流しながら、語学力を高めることができる貴重な機会となっています。今年度は、受講希望者も非常に多いことから、その実施に向けた準備を進めております。国外への移動など、まだまだ制限がある状況が続いてはおりますが、そのような中でも学生が少しでも自身の英語力を向上することができるよう、学生の学びの機会の拡充に向けた支援を続けて参ります。



第1回オリエンテーションの様子(4月24日)

全学共通教育センター

サコラウスキー・ジェシー、下村 智子

PBL「現代生物学の話題」の 授業の紹介と発表会の報告

「クラゲもちゃんと寝るらしい」「恐竜の卵には柔らかいのもあったらしい」……一般社会で話していたらヒマ人認定されそうな、そんな生物関係のニュースについて、「本当かなあ」と思いながら大真面目に調べて発表する、というのがこの授業の特徴です。

全学共通教育センターでは通常の座学以外に、学生自ら問題を見つけて解決するPBL形式(問題解決型学習)を推奨しており、この授業もPBL形式の授業です。今年のクラスは3クラスで、各クラス5-7人でした。授業では、2回を1セットとし、1日目には、生物関連の4つの話題から1つを選んで、その話題を選んだ人同士でグループを作って深読み・発表準備し、2日目にグループごとに発表します。各回の話題は生物関係のニュー

スや論文紹介記事などから選びます。ゴールは教員側では設定せず、「学生が深めたい方向に」深めていきます。

7月の最終週、各クラスがこれまでの話題から1つ選んで公開発表会を行いました。

1. 昆虫食の可能性～昆虫食の普及を目指した取り組み～ 7月25日(月)13:00～14:30(参観者:5名)

元記事は、昆虫食についてです。マダガスカルは固有種のキツネザル類で有名ですが、現地の人の食糧として狩猟され、数が減っていることから、昆虫食を利用してもらうことでキツネザルの保全を目指そうという試みについての話です。発表会では昆虫食の利点、普及を目指した取り組みについて紹介し

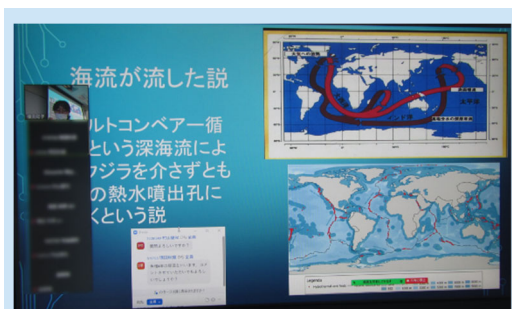
ました。参観の先生からは、昆虫を抵抗なく食べる工夫も大事だが、マダガスカルのように昔から昆虫を食べていた経緯があるなら、「昆虫として」食べる文化も維持すべきではないか、というご意見もいただきました。テーマにちなんで、当日は昆虫食の試食も行いました。



2. 深海に沈むクジラの死骸と飛び石仮説 7月28日(木)14:40～16:10(参観者:6名)

元記事は、クジラの死骸に、熱水噴出孔に生息する生物と同様の生物がみられることから、クジラの死骸はこれらの生物が熱水噴出孔の間を移動する際の「飛び石」的の生息地になっているのではないかと仮説についての記事です。この記事を受けて、飛び石仮説の説明、クジラの死骸の発見状況、熱水噴出孔との共通の生物、飛び石仮説に対する反論などが議論されました。

当日はクジラの研究室の学生さんたちも参加して下さい、飛び石仮説の検証のために必要なデータや深海流との関係等について話し合いました。現在までに未だクジラの死骸の発見も、深海生物の調査も進んでいない中、「飛び石仮説」の検証は今後の調査次第で大きく発展しそうなテーマだと感じました。

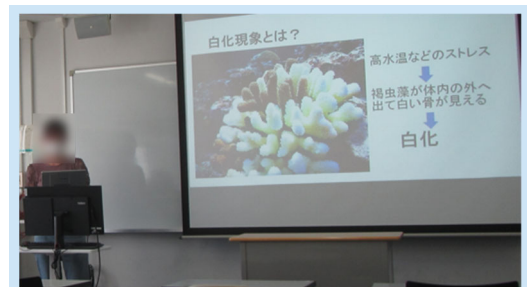


3. サンゴ礁 7月29日(金)14:40～16:10(参観者:4名)

一般にサンゴの白化は、死滅の前触れと考えられていますが、元記事では、サンゴの白化は共生している褐虫藻を消化・吸収したりしている状態であり、サンゴが生き残るための生存戦略の一部だという見方をしています。

発表では、サンゴの中でも褐虫藻と共生する種、褐虫藻と共生する時のサンゴ側・褐虫藻側の利点とパートナーとしての特異性、サンゴによる褐虫藻の取り込み方・おびき寄せ方などを伝え、水温が高くなると褐虫藻が光合成に関係するタンパク質を修復できなくなることで死滅し白化が起きることを説明しました。参観者からは良く調べられていて面白かったというコメントをいただきました。

最終発表ということで、3クラスとも気合の入った発表でした。中にはみんなでファミレスに集まって当日の朝4時まで掛かってスライドをまとめたクラスもありました。



生物学の場合、講義を聞いて基礎的な知識や考え方を学ぶのも大切です。一方、この授業のように生物関係のいろいろな話題について考える経験は、各自が生物の面白さ、疑問を見出す力や、自分で追求する力をつけるためにもいい機会だと思います。

せっかくの生物学。生物の織り成すさまざまな世界を「自分目線」で味わってみるのはいかがでしょうか？

全学共通教育センター
福田 知子

全学資格プログラムセンター取り組み紹介

本センターの業務のひとつである「教職課程及び学芸員養成課程のカリキュラム編成と展開」についての取り組みを紹介します。

1. 教職課程運営部会の取り組み

1-1. 教職課程の自己点検・評価

教職課程については、省令によって本年度から、質の向上・内部質保証のための「全学的な組織体制の整備」及び「自己点検・評価」の実施が求められています。本学では全学資格プログラムセンターが中心となって、全学的な教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画の策定、教育課程の編成と教員組織整備に関する調整、学修成果に関する情報（「履修カルテ」等）の集約・分析や全学的な観点からのFD・SD等を実施します。

本センターは「自己点検・評価項目及び分析における観点」を作成、教職課程運営部会に提案し承認を得ました。また、根拠資料・エビデンスの収集、FD・SDの実施及び情報公開の方法等、今後の自己点検・評価の進め方について協議を重ねています。

1-2. 各学部教職課程の取り組み

本年度の教職課程履修者数は前期終了の時点で、人文、生物資源、工の3学部あわせて約130名となっています。各学部の資格委員会等は学務担当の協力も得ながら、7月から8月にかけて実施される1年生を対象とした教職課程ガイダンスに始まり、4年間の教職課程での学びの集大成となる教育実習、教職実践演習まで、更に卒業生に対しても次のようなきめ細やかな支援を行っています。

人文学部では、教職を目指す学生が実践的な情報を得ることができるように、卒業生の若手教員にお話を伺う会等を開催しています（詳細は前回のニュースレター参照）。今回は、その会でお世話になった森岡駿先生（鈴鹿市立創徳中学校教諭・社会科・2020年度人文学部文化学科卒業）を六角英彰特任教授（人文学部）が訪ねました。現在は、3年生担任、ソフトボール部顧問として活躍し

ています。その活躍は在学生にも伝わり、「どうしても教員になりたい」という想いが数々の困難を乗り越えさせる、という気持ちをもったようです。

生物資源学部では、卒業生の若手教員や教職支援室から教職の魅力を伝えるガイダンスを実施しています（本年度は85名が参加）。このような機会は2年次以降も定期的に設けています。また、3年生を対象に教職インターンシップを実施している他（本年度は9月に2週間、8名が参加予定）、在学生及び卒業生に対して臨時的任用教員や非常勤講師登録を紹介する取り組みを行っています。更に卒業生に対しても教職支援室等の利用を認めるなどの支援や、毎年、県内高等学校と懇談会を開催して教育実習の実施状況等について情報交換を行うなどの連携も図っています。

工学部は令和5年度が教職課程の完成年度となっており、来年度4年生となる学生の教育実習の実施に向けて、県教育委員会と緊密に連携を取りながら準備を進めています。

2. 学芸員養成課程運営部会の取り組みについて

人文、教育、生物資源の3学部には、自らの主専攻に加えて学芸員養成課程で学び学芸員資格の取得を目指す学生もいます。学芸員になるには、「博物館に関する科目」を16単位取得した上で「博物館実習」（3単位）も履修する必要があります。人文、教育、生物資源の各学部ではそれぞれ、2021年度に15名、7名、33名、2022年度に23名、8名、37名が「博物館実習」を履修し資格を取得しています（2022年度は見込）。コロナ禍においても実習・資格取得が滞りなく進むよう、各学部の資格委員会等が学務担当の力強い支援を得ながら学芸員養成課程を運営しています。

全学資格プログラムセンター

玉城 政和、下村 智子、長濱 文与
六角 英彰、守山 紗弥加

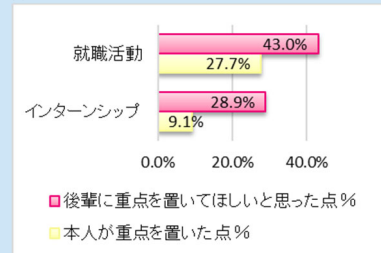
三重大学における持続可能な教育・学習の実践 令和3年度卒業生アンケートの結果に基づいて

(1) <回答率>

学部卒業生	17.7%
大学院修了生	20.0%
事業所(学部卒業生)	28.8%
事業所(大学院修了生)	26.1%

(2) 結果を理解する方法には要注意です。例えば、「大学生活で重点を置いたこと」に比べて「後輩に重点を置いてほしいこと」が低いからといって、その分「頑張らなくてもいい」と解釈することは禁物です。

(3)



※本センターでは、卒業生アンケートを含め、各種アンケート調査の結果報告書を本学HPにて公表しています。

<https://www.hedp.mie-u.ac.jp/enq/>

本学では、平成17年(2005年)度から、卒業(修了)後1年が経った卒業(修了)生及び卒業(修了)生が就職した事業所を対象に、「卒業生・修了生・事業所へのアンケート調査」を実施しています。以下、令和3年(2021年)度実施された調査をもとに、その結果の一部の内容をご紹介します⁽¹⁾。

卒業生アンケートには様々な質問項目が設けられています。中には「大学生活で重点を置いたこと」と「後輩に重点を置いてほしいこと」も入っています。本来、これらは別々の項目になっていますが、同じ調査において同じ回答者が回答していることと、各々の質問項目に同じ選択肢が設けられていることから、合わせて考えることも可能です。合わせて考えることで、「私は〇〇に頑張ったけど、実際社会に出てみると〇〇が重要だった」という、興味深い情報を得ることができます⁽²⁾。例えば、「大学生活で重点を置いたこと」(①)に比べて「後輩に重点を置いてほしいこと」(②)の選択率が高かった項目として「インターンシップ」、「就職活動」が挙げられます。これらの差は、各々19.8% (②28.9%①9.1%)、15.3% (②43.0%①27.7%)で⁽³⁾、各調査項目の中でも最も大きい差を示しました。同調査は、令和2年度の卒業生を対象に、その1年後である令和3年度に行われたものになります。令和3年度の卒業生が入学した年からはインターンシップや就職活動に関するキャリア支援がさらに充実化されました。

つまり、本学の意味決定が学生のニーズにすでに応えられる方向に向いているという風に解釈することが可能です。

他にも、本調査には後輩に対するアドバイスやメッセージを求める記述式の質問項目が設けられました。中には、「あれやこれや言われるかと思いますが、目の前のことを一生懸命取り組めることさえできれば、大学生活は充実します。大学生活が充実すれば、卒業した後ふりかえると『あの時頑張ったから今の自分があるんだ』と、自信をもって言うことができます。無意味に過ぎていく時間をどれだけなくせるかが、大切だと思います」(人文学部卒業生)など、後輩に対する愛情が見て取れる暖かいコメントが多数よせられました。

教学IR担当者として、上記のコメントは、学生が在学中に経験したことは何らかしらの形で本学を出た後にも影響するという、簡単明瞭なメッセージを意味すると理解しております。その意味で「卒業生・修了生・事業所へのアンケート調査」は、本学の教職員が熱心に取り組んだ教育・研究・大学マネジメントに関する成績証明書でもあり、また、今後の意思決定に役立つ道標としても活用可能なものと思います。次回の調査までまだ3年もありますが、卒業生からまたどのような話によせられるか、期待がふくらむものです。

高等教育開発デザイン・IRセンター
鄭 漢模

各種アンケート・調査	
> 4つの力等に関するアンケート > 教育満足度調査 > 卒業生・修了生・事業所への調査 > 各種アンケート・調査	
卒業生・修了生・事業所への調査	
調査対象	卒業・修了後、1年目を迎えた三重大学の卒業生・修了生、卒業・修了後、1年目を迎えた三重大学卒業生及び修了生が就職した事業所、(継続調査の場合) 卒業・修了後、4年目を迎えた三重大学の卒業生・修了生
調査期間	実施年度の12月から2月の間
目的	三重大学が提供している教養教育・専門教育が、社会のニーズに相応しているかを検討する目的で三重大学の卒業生・修了生、もしくは卒業生・修了生が就職した事業所を対象に教育満足度や自己評価及び教育ニーズに対する調査を行っています。調査の結果は、三重大学の高等教育の改善に活用されます。
お問合せ	ご不明な点がございましたら、以下の担当者までご連絡ください。 高等教育デザイン・推進機構 アンケート担当: enq@dher.mie-u.ac.jp

令和4年度全国大学教育研究センター等協議会 参加報告

2022年9月7日(水)～8日(木)、広島大学

9月7日(水)から8日(木)まで2日間、広島大学にて、令和4年度全国大学教育研究センター等協議会がハイブリッド形式で開催された。「学生の学習意欲を育む教育環境の創造」といったメインテーマで開かれた同協議会には、全国26大学及び国立教育政策研究所が参加し、各大学の実践や直面している問題についての共有を行った。本学は2017年度より同協議会に加盟し、積極的な活動を続けてきている。

1日目には、慶應義塾大学教職課程センター／大学院社会学研究科 教授 鹿毛雅治氏による基調講演があった。同講演では、学習内容に対する学生の「没入」(エンゲージメント)を引き起こすためには、学習意欲を促進する心理的メカニズムに対する理解のもと、教育環境を構築する必要があることが強調された。そして、そのような教育環境の構築において求められるアプローチが「太陽型アプローチ」である。ここでいう「太陽型アプローチ」を取るための大学教員の役割として、大学でしかできない学びへの誘い、学び惹き込む教育環境のデザインなどが挙げられる。基調講演後、事前に分けられたグループ分けに従い、グループごと違う部屋に集

まり、ディスカッションを実施。各自所属先の大学における教育環境について話し合う時間を持った。

2日目には、各教員が事前に申し込んだテーマのもと、各大学の取組事例を共有し、ディスカッションする場が設けられた。本学では各々、分科会8「ディプロマ・サプリメント(学位証書補足資料)」、分科会9「卒業生・修了生に対する追跡調査」に参加し、本学における取組を共有するほか、他大学の事例から今後の改善策を得ることを試みた。分科会8では、成績表以外で学修成果を可視化する方法としてレーダーチャートを挙げつつも、レーダーチャート形式の妥当性、入れるべき指標の妥当性について考えていかなければならないとの意見などが出された。また、分科会9では、卒業生・修了生に対する追跡調査の難しさについて意見が寄せられた。主に、調査方法(郵送、メール、同窓会)、教育改善など具体的な活用方法、全学的な協力を得ることの難しさ、アンケートに対する信頼度の低さに対する懸念などがあった。

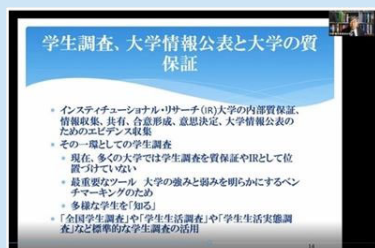
高等教育開発デザイン・IRセンター
荻田 修一、鄭 漢模

令和3年度全学FD・SD「教育の質保証の課題と最新動向 ～教学マネジメントの視点～」の開催報告

3月22日(火)、全学FD・SD「教育の質保証の課題と最新動向～教学マネジメントの視点～」をオンラインで開催しました。本FD・SDでは桜美林大学教授の小林雅之氏を講師としてお招きし、大学における教育の質保証を取りまく課題とその最新動向について、教学マネジメントの視点からご講演いただきました。大学教職員にとって関心の高い内容であり、本学のみならず学外の参加者も含め100名以上と、大盛況となりました。高等

教育について様々な論点からお話いただき、中でも大学が行う各種調査と大学の質保証を結び付け、「調査結果につき教学IRの観点から大学経営にフィードバックしていくと同時に、調査結果を情報公開していくことで更なる質の保証につなげていくことが重要である」という非常に意義深いお話を頂戴しました。

高等教育開発デザイン・IRセンター



令和4(2022)年度前期 オンラインTA研修報告

1. 実施の概要

実施期間: 4月4日～5月10日

対象: 令和4年(2022)年度新規 TA 採用予定者(TA を目指す学部生も参加可)

実施形態: オンデマンド型(非同期型)研修

2. 部局別受講者数(TA研修全課題修了者数)(cf. 図1)

今年度(前期)の受講者数(全ての課題修了者数)は200名で、前年度の前期(160名)と比べると40名の大幅な増加となりました。部局別には、工学と生物資源の学生(主に大学院生、学部生も一部含む)が約9割を占め、昨年の前期と比べて工学(92→105)、生物資源(57→72)ともに増加しています。

3. 受講者アンケート集計結果(cf. 図2)

今年度前期の受講者アンケートの全体の満足度(4件法)では、「4. 非常に満足」が昨

年前期の30%から39%に増加し、「3.満足」+「4. 非常に満足」の合計が94%と直近3か年で最も高い結果となりました。受講者アンケート結果に基づいた課題のリニューアルによる効果が上がってきたと考えられます。

リニューアル後の課題の構成内容は、課題1～3はTAとしての姿勢・主な業務・注意点、課題4と課題5はオンライン授業に関する内容を各4問ずつ合計20問で、各設問は問題スライドと解説スライドの2ページの構成で統一、スライドを読んだあとに小テスト(選択)に解答し、振り返りコメントを書き込み及び閲覧する流れとしています。(cf. 表1)

自由記述式の項目では、「コンテンツが簡潔で各課題においてどのようなことを目的に実施するかが明確であった。また、課題4、5では、実際に起こりやすいトラブルと、それに対するトラブルシューティングが記載されており、TAの業務に対しての不安解消につながった。」等の声を確認できました。

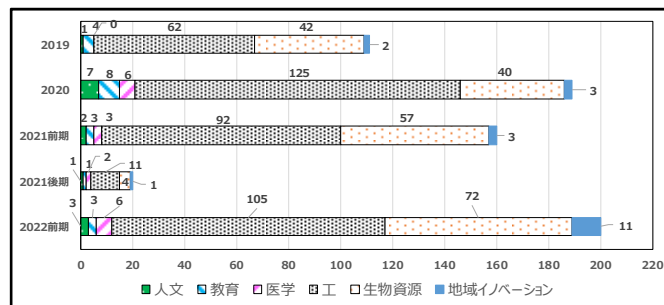


図1 部局別受講者数
(TA研修全課題修了者数)

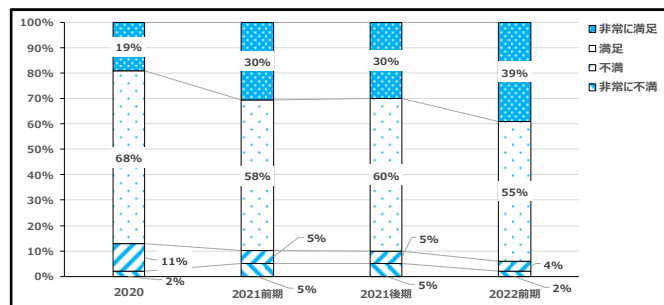


図2 受講者アンケートによる
全体の満足度(4件法)

	2020年度	2021年度前期	2021年度後期	2022年度前期
実施形式	オンデマンド型のオンライン	オンデマンド型のオンライン	オンデマンド型のオンライン	オンデマンド型のオンライン
実施時期	4/24～5/31	4/5～5/10	9/27～11/1	4/4～5/10
受講者数 ※全課題修了者	189人	160人	20人	200人
課題内容	Moodle3.5のコースにある4つの課題に回答 課題1: 小テスト(記述回答→定型解説文のフィードバック) 課題2: 課題1の振り返り 課題3: チャットルーム 課題4: 小テスト(選択10問)	Moodle3.5のコースにある4つの課題(小テスト計30問)に回答 課題1～課題4※: スライド+小テスト(選択)+コメント書き込み&閲覧 ※課題1～3はTAとしての姿勢・主な業務・注意点で各5問、課題4はオンライン授業で15問学習	Moodle3.5のコースにある4つの課題(小テスト計20問)に回答 課題1～課題5※: スライド+小テスト(選択)+コメント書き込み&閲覧 ※課題1～3はTAとしての姿勢・主な業務・注意点で各4問、課題4～5はオンライン授業で各4問	Moodle3.5のコースにある4つの課題(小テスト計20問)に回答 課題1～課題5※: スライド+小テスト(選択)+コメント書き込み&閲覧 ※課題1～3はTAとしての姿勢・主な業務・注意点で各4問、課題4～5はオンライン授業で各5問

表1 年度別
実施形式・
時期・課題等

アドミッションセンター
宮下伊吉

2022年度オープンキャンパス＆サマーセミナー報告

・来場型・オンライン型でオープンキャンパス開催

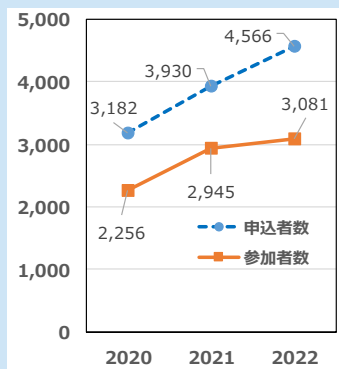


図1 オープンキャンパス申込者数・参加者数※2020～2021年度はオンライン開催、2022年度は来場型・オンライン型の合計

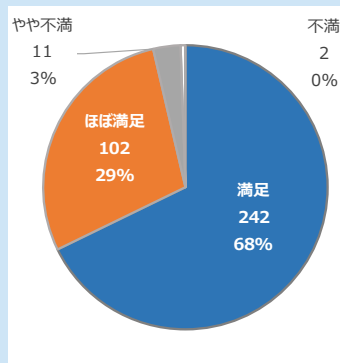


図2 オープンキャンパス全体の満足度 (n=357)

8月7日から8月10日に開催された2022年度オープンキャンパスは、来場型・オンライン型での開催となり、オンライン開催の申込者数は4,566名（前年より636名増）、参加者数は3,081名（前年よりも136名増）と、過去2ヵ年に比べて申込者数・参加者数ともに増加しました（申込者・参加者ともに来場型・オンライン型の合計数）。全学部ではありませんが、3年ぶりに来場型が復活したことや、本学のホームページのオープンキャンパス特設ページに新たな企画（リアル謎解きゲーム）や情報（クラブ・サークル紹介動画）を公開したことなどから、7月11日の事前予約受付開始後、来場型企画は24時間以内にほぼすべての定員が埋まり、オンラインのLIVE配信企画も定員（Zoom参加者数上限）に達

したプログラムがありました。アンケートでは、模擬講義・体験授業やツアー企画をはじめ、LIVE配信企画などが高い人気を示していました。参加した高校生からは「他大学のオープンキャンパスと比較しても非常に興味深い内容の展示、体験授業等があり、とても面白かったです。ぜひ三重大学に入学したいという思いが強まりました（来場型参加）」「説明や案内の動画は10分前後で気軽に端的に見られそれでいて内容が把握しやすくLIVE配信の見逃し動画は勉強のことから日頃の学部での生活のことまでわかったので満足した（オンライン型参加）」などの声があり、オープンキャンパス全体の満足度は97%（満足68%＋ほぼ満足29%の合計）という高い結果でした。

日時	学部	実施形態	備考
8月7日（日）	人文学部	来場	来場定員500名※同伴者除く
8日（月）	教育学部	オンライン	
9日（火）	医学部	オンライン	
10日（水）	工学部	来場・オンライン併用	来場定員800名※同伴者含む
	生物資源学部	来場・オンライン併用	来場定員350名※同伴者除く

・対面とオンラインの16テーマでサマーセミナー開催

サマーセミナーは、三重大学と三重県立学校長会および三重県私学協会の協力のもと平成17年度より17年間続いている高大接続の取り組みであり、高校生が進路選択を考える上での貴重な機会となっています。2022年度は、7月から8月にかけて「コトで学ぶ文学理論」「レゴブロックを使った簡易ロボットの作製」などの対面での13の講義・実習のほか、「医学部教授による、超絶詳しいイカ解剖実習」など3つのオンライン企画を含む16テーマのユニークなセミナーが実施されました。コロナ禍での3年ぶりの対面企画の開催が実現できたことと、高校1年生からの新教育課程施行により、総合的な探究の時間等による探究的な学習が本格的に始まったこともあり、校長会事務局が集約した当初の申込数は1,316名と前年の当初申込数706

名から大幅に増加しました。前年は16テーマのすべてのセミナーがオンライン開催であったため、当日のオンライン受講者の合計は626名でした。今年は対面企画中心で定員数が前年よりも減りましたが、申込者数の増加により定員数を全体で401名まで増やした結果、当日は対面339名、オンライン82名の合計421名の受講となりました。

参加した高校生からは、「対面での実施で実際に顕微鏡を動かしたり解析をしたりすることができて、難しく感じる場面もありましたが最終的にはどのような研究をどのような目的でされているのかがよく分かり、とても楽しく有意義な時間でした。また、初めて実際に大学というものに入ったので今までとは違った雰囲気を感じ大学生になるという事が身近に感じられ、より一層受験勉強を頑張りたい

いと思えました(対面参加)」や「約2時間英語だけの環境に触れることで、自分の理解出来る単語や、分からない単語を知ることが出来たり、色々な決まり文句みたいなものもあって勉強になった。人のプレゼンを聞いて、質問することは自分の理解にも繋がるし、とても貴重な時間になった。初めてセミナーを受けて見たが、とても面白く、これからも

たくさんの人と関わっていききたいと感じた(オンライン参加)」など、セミナーに満足した声がアンケートに多く寄せられ、セミナー全体の満足度は94%(非常に満足56%+満足38%)でした。

アドミッションセンター
宮下伊吉

全国会議等参加状況

○ 全学共通教育センター

- 令和4年5月19日(木)～20日(金)
令和4年度国立大学教養教育実施組織会議及び事務協議会

○ 高等教育開発デザイン・IRセンター

- 令和4年9月7日(水)～8日(木)
令和4年度全国大学教育研究センター等協議会

○ アドミッションセンター

- 令和4年5月26日(木)～5月28日(土)
令和4年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会(第17回)

編集後記

高等教育開発デザイン・IRセンター 講師 鄭漢模

三重大学高等教育デザイン・推進機構ニュースレター 第60号をお届けします。ニュースレターは、機構に所属する4つのセンターが取り組んだことを、大学内外の方々と共有できる貴重なコミュニケーション手段です。そのような貴重な刊行物の編集に、着任したばかりの私に携わらせていただいたことを大変光栄に思う次第です。本ニュースレターは、各センターに所属する先生方のご協力のもと作成しております。お忙しい中、ご寄稿、ご協力いただきました先生方には、この場をお借りして熱くお礼申し上げます。編集にご助力いただきました教務チームの皆様にも感謝致します。

本ニュースレターに関してご意見・ご感想等がございましたら、下記までお気軽にご連絡ください。

電話:059-231-9392(内線:9392) e-mail:jeonghanmo@hedp.mie-u.ac.jp

創刊日:2008年12月19日